

Newsletter

奈良教育大学 教職大学院 2012.vol.3(17)

2012年12月20日 発行

奈良教育大学 大学院 教育学研究科

(専門職学位課程)教職開発専攻

〒630-8528 奈良市高畑町

TEL&FAX 0742-27-9354

<http://www.nara-edu.ac.jp>

発行 奈良教育大学 教職大学院広報係

目次

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------|
| 1. これからの先生に期待すること・・・P.1 | 3. 本学教職大学院で学べて良かった・・・P.4 |
| 2. ここが自慢！奈良教育大学 教職大学院
・・・P.2 P.3 | 4. 案内・・・P.4 |
| | 5. あとがき・・・P.4 |

1 これからの先生に期待すること

大和郡山市 教育長 赤井 繁夫

奈良県では『古事記』編纂 1300 年を迎えた今年から、『日本書紀』編纂 1300 年を迎える 2020 年までの 9 年間で「記紀・万葉プロジェクト」と題して、日本の原風景を思い起こし日本人の心の復興を目指した取り組みをおこなっています。

また、大和郡山市でも、本市が稗田阿礼の出身地であることから、「人間ってすごいじゃないか。語り継ごうよ、語り部の里から。」をキャッチフレーズに、今年（2012 年）を古事記 1300 年紀として、「当世語り部“口座”」「古事記と宇宙のシンポジウム」「語りつぐむかしむかしのはなし」など様々な取り組みをしているところです。

もちろん、市内各校区には、それぞれ歴史や言い伝えのある社寺や石仏、昔話などが伝わっています。次世代を担う子どもたちには、ふるさとを愛し、愛着を持ってふるさとのことを語り継いでもらいたいものです。

奈良教育大学では古都奈良の地であって、教職に対する高い使命感と指導力を併せ持つ教員の養成を目指し、これまで多くの有能な教員を世に送り出してこられました。また、平成 20 年には教職大学院を開設され、社会の構造的な変化に伴う教育問題に対応すべく、「高度な専門性と実践力を備えた教員養成」に励んでこられました。そこでは、「授業・教科指導の専門家」としての教師、「生徒指導・カウンセリングの専門家」としての教師、「スクールリーダー」としての教師の中から一つに焦点を定めて取り組んでおられると伺っています。

教職大学院におかれましても、連携協力校での実習と協力校との共同研究を含めて、学びの場は基本的には学校であろうと思います。そして、今後求められるのは、地域社会をも巻き込んだ学びの場としての「学校」ではないでしょうか。県でも「地域教育力サミット」を通して、学校、地域、家庭が連携して教育力を高めるための方策として「地域参画」を目指しているようです。また、国も「地域の人々と一体となって子どもたちを育てていく『地域とともにある学校』」が議論されているようです。

“Think Globally, Act Locally”と言われます。教職大学院に学ぶ院生の皆様には、生涯学習を含めた広い視点から学校教育を俯瞰していただき、未来の日本の教育を切り開くパイオニアとして活躍されることを期待しています。



本学教職大学院生に対し無作為に「本学教職大学院の自慢」についての声を聞いてみました。その結果、以下の5つにまとめることができました。それぞれの魅力について紹介します！

(1) 理論と実践の往還を目指します

本学教職大学院の強みは何とんでも、公立の学校現場に出て観察や実習を行う機会が多くあるということです。

現職院生以外の者にとっては、学校実践Ⅰ（2週間）、学校実践Ⅱ（2週間）、学校実践Ⅲ（4週間）、学校実践Ⅳ（4週間）の計4回の学校における実践的な学びの場があります。学校実践Ⅰ・Ⅱは、それぞれ連携協力校である公立の小学校、中学校の取組に参加し、子どもの見取りの仕方、授業・学級経営の方法、学校の仕事等を学びます。学校実践Ⅲは、研究を希望する学校種の教員助手として参加し、各場面における対応の方法を学びます。学校実践Ⅳは、研究目的に沿って、学校で実践研究を行います。

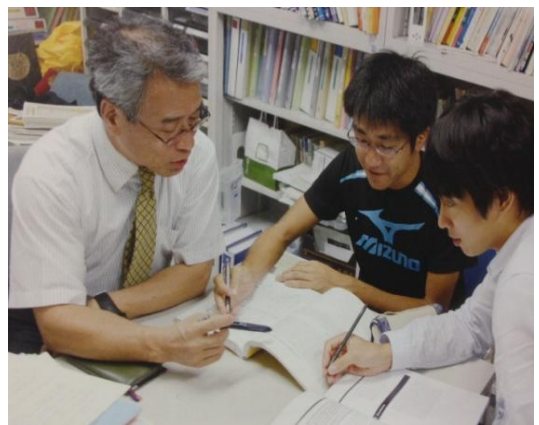
授業で学んできた理論を実際にどのように学校現場に生かすことができるのか、また自分の授業力がどの程度身に付いたのかを、学校実践を通して確認、検討し、学校現場に出るための準備をします。

一方、現職教員として本学教職大学院で学ぶ院生は「これまで学校現場で実施してきた自分の実践がどのような理論に基づいているのか」についての研究に取り組みます。そして、新たに身につけた理論を踏まえ、それを取り入れた実践と成果を学校現場に持ち帰り検証し、指導法の改善につなげていきます。

このように本学教職大学院は、まさに理論と実践の往還を実感し実践的な指導力を身につけることができる学びの場なのです。

(2) 本学教職大学院の先生と院生の距離が緊密です

私たちが学んでいる本学教職大学院棟は、1階に院生室があり、2階には先生方の研究室があります。わからないことや困ったことがあればすぐに質問や相談に行くことができます。先生方もよく院生室に来て声をかけてくださいます。このように先生と院生との間が物理的に近い距離にあるだけでなく、先生と院生とのつながりという点においても、「先生と院生との距離が近い」と実感している院生が多いです。研究に関する指導にとどまらず、将来の進路をはじめとする院生生活全般にわたる悩みに対しても大変きめ細かく丁寧なアドバイスを受けることができます。



(3) 個性豊かな院生が集まっています

本学教職大学院に入学してくる院生は、大きく分けて『大学卒業後入ってくるストレート院生』『社会人経験者院生』『現職教員院生』の三つで構成されています。

また、本学教職大学院には、全く教員免許を持たない者には2年間、中学校や高校の教員免許を持っている者には1年間、本学教育学部で「小学校教員免許取得プログラム」としての授業科目を履修すれば、一種免許状が取れる制度があります。そして、免許状取得後に入る教職大学院の2年間とを合わせて3年コース、4年コースといわれる学生も共に学んでいます。

なお、年齢も20代前半から40代まで様々で、出身地域も異なります。「高い専門性を身につけた教師を目指す」という同じ目標の下、集まった異色な集団なので自分の専門分野以外の様々な知識や体験に触れることができます。とりわけ社会人経験者の院生からの話は、ストレートの院生にとっては参考になることばかりです。現職教員の院生の方からは生き生きとした現場の実態を教えてください。

互いに刺激を受け切磋琢磨し合う環境があります。

(4) 学習環境が充実しています



本学教職大学院棟には、院生室という一つの部屋があり、院生一人ひとりに仕切られた学習机があり、個人のロッカーも備えられています。パソコンも各自に貸与されています。院生室や教室には無線LANが完備されているので、インターネットも活用できます。また、プリンターやコピー機、スキャナーや輪転機など、研究を進めていくための機器が整えられています。ビデオカメラやデジタルカメラも活用できるので、多様な教材作成も行えます。

多少狭さを感じますし、さらに充実して欲しいところもありますが、院生が一つの部屋の中で学習できる環境が確保されているということは私たちにとってはありがたいことの一つです。

この恵まれた環境の中で、お互いに共通理解を重ねながら「全体のまとまり」と「個人の輝き」をバランスよく身につけていきたいと努力しています。

(5) 毎日、目の前に子どもの活動する姿が見られます

本学教職大学院棟のすぐ横には本学附属小学校の運動場とプールが隣接しています。運動場の向こうには附属小学校の校舎が見えます。毎日、子どもによる校内放送や子どもが運動する姿を身近に実感することができます。

特に小学校教員を希望する院生にとっては、子どもの実態がわかり、体育の授業における指導の仕方も垣間見ることができます。早く学校現場に出て指導したいという気持ちと、やる気が沸き起こってきます。



新たな自分への挑戦

社会人院生（2011年度入学）

M2 高岡 弘典

10月9日から11月2日の約4週間にわたり奈良県立平城高等学校において学校実践Ⅳの実習生としてお世話になりました。学校実践Ⅳは課題研究の内容とも密接に関係するため、これまでの学校実践（Ⅰ～Ⅲ）以上に授業その他についての計画や準備を綿密に行いました。

とは言うものの、実際に始めてみると、毎日現場で起こる様々な出来事に振り回されてしまい、目の前にあることをすることだけで精一杯でした。そんな中でも大学側の指導の先生や連携協力校側の指導担当の先生をはじめその他多くの先生の励ましや、的確なアドバイスのおかげで何とかやり抜くことができました。厚く感謝申し上げる次第です。授業実践では主にグループ学習を取り入れた協働学習型の授業形態に取り組みました。夏目漱石の『こころ』という非常に長い作品を扱う単元でしたが「アニメーション」や「ジグソー学習」と言った指導方法を取り入れるなどして、生徒が作品により親しめる工夫をしました。「先生の話の話を聞いている授業だけでなく、友人の意見や考えを聞いたりするのは楽しい」、「自分とは違う考え方を知って刺激になった」など、グループ学習に対する好意的な声もたくさん聴くことができましたが、自分自身の指導力の不足により学力の定着という面ではまだまだ多くの課題を残した実践であったのではないかと反省しています。

本来なら高等学校での学校実践はなく、私自身が将来において高校の国語科で教鞭を執ることを希望したため、無理をお願いして実現したものでした。私としても今後同じような実践を希望する人のためにも新たな道をしっかり切り拓きたいという思いもあり、精一杯の力で臨んだ実践期間でもありましたが、それでもやはり私一人の力だけではなく、本学教職大学院の先生はもちろん、連携協力校の多くの先生や生徒の皆さんの存在が大きな力になったと感じています。

来年度からいよいよ高等学校でも新学習指導要領が年次進行で実施されます。国語科においても「言語活動の充実」が求められており、実際の教育現場でもその指導方法については模索されている段階だと思います。私自身が来春教壇に立った時は、本学教職大学院のこれまでの学びや、今回の実践を踏まえてまとめていく学位研究報告書の中で見出したことを踏まえて、より自信と誇りを持って、生徒たちに学びの楽しさを伝えられる教師を目指して頑張りたいです。



案内

本学教職大学院 第二次入学試験

出願期間：平成25年1月7日(月)～11日(金)

試験日：平成25年2月10日(日)

合格発表：平成25年2月14日(木)

<問い合わせ先>

〒630-8528 奈良市高畑町

奈良教育大学 入試課 TEL：0742-27-9126

URL：http://www.nara-edu.ac.jp

E-mail：nyuusi@nara-edu.ac.jp

あとがき

本号では、本学教職大学院の連携協力校として多くの実績を重ねてくださっている大和郡山市の赤井繁夫教育長より巻頭の言葉をいただきました。教育長も、その中で本学教職大学院が目指している「高度な専門性と実践力を備えた教員養成」の重要性について触れておられます。今後、県内市町村教育委員会並びに公立学校の先生方の一層のご支援とご理解をいただく中で、本学教職大学院との連携協力と協働の輪がさらに広がっていくことを強く願っています。

(文責 小谷)